



## 東地中海地域ニュース

### イラン：第10期大統領選挙（2）

研究員 山崎 和美

敗北した改革派ムーサヴィー元首相の支持者たちによる抗議行動は13日夜から14日未明にかけて続き、警官隊との衝突がテヘラン各地で発生した。小競り合いは投票日の12日夜から既に生じていたが、日に日に衝突の規模が大きくなり、15日の抗議デモでは、ついに死傷者を出す事態に至った。抗議行動はテヘランのみならず、中部エスファハーン、南部シーラーズ、北東部マシュハド、北西部タブリーズ、中西部ケルマーンシャーなど地方5都市に飛び火し、暴動に発展した可能性もある。欧米メディアは繰り返し、火の手が上がるテヘラン市街や人々の叫ぶ姿を映し出している。16日にも改革派支持者たちによる大規模な集会が開かれる模様だ。

### デモ拡大で混乱するテヘラン

改革派の抗議デモ参加者は「独裁主義に死を」と叫びながら警官隊に石やごみ箱を投げつけ、放火した。夜になると市内の広場に興奮状態の暴徒が現れ、商店に押し入り、放火、看板の破壊などの行為に及んだ。広場ではアフマディーネジャード氏支持派とムーサヴィー氏支持派と見られる群衆が、互いに怒りの声を上げながら石やびんを投げ合う騒ぎもあった。欧米メディアは、治安部隊が棍棒でデモ隊に殴りかかる場面を放送し、一部では催涙弾が使用され、威嚇射撃も行われた、と伝えた。

地元メディアの報道やAFP通信によると、治安当局は14日までに、ムーサヴィー氏を支持する改革派の2政治組織に属する幹部や活動家約170人を逮捕した。ロイター通信によれば、当局はハータミー前大統領の弟も一時拘束した。また、当局は、外国メディアによるデモ現場取材を規制し、14日、ドイツやオランダのテレビ記者に国外退去やホテルからの外出を禁止する措置を取った。

政府系放送局プレスTVは、ムーサヴィー元首相が選挙結果に抗議するため15日に全国で予定したデモ行進の開催申請を、内務省が違法と判断して却下した、と伝えた。ただし、ムーサヴィー氏の支持者らは、政府側の意向にかかわらず、予定通りデモ行進を決行した。目撃者によると、行進が始まったのは15日午後(日本時間同夜)で、若者中心のムーサヴィー氏支持の市民が、市中心部のエンゲラープ(革命)広場から西のアーザーディー(自由)広場まで約5キロを練り歩いた。

学生を中心とするデモ隊はテヘランで1万人規模に達したが、テヘラン中心部は人で埋め尽くされ、「100万人規模」と報じるメディアもあった。AFP通信は、15日午後(日本時間同日夜)にこの抗議デモは数十万人規模に達したと報じた。英BBC放送は、治安部隊に実弾の発砲許可が出たと報じ、ロイター通信はイラン国営テレビの報道として、「銃声が聞こえ、人々が逃げ回っている」と伝えた。今回の抗議デモは、反体制デモとしては1979年のイスラム革命後最大である。大統領選に出馬したムーサヴィー元首相も12日の投票後初めて公に姿を見せ、民衆に再選挙に向けた決意を訴えた。イラン当局は抗議デ

モを禁止して警官隊を配置した。

15 日夜、ついにこの抗議デモ参加者の中に死傷者が出てしまった。イランの国営ラジオ、国営テレビ、英語放送のプレス TV などは 16 日、「テヘランでの違法な集会周辺で 7 人が殺害された」と報じた。彼らは最高指導者ハーメネイー師に忠誠を誓うイスラム民兵組織「バ斯基ージ(人民動員軍)」の事務所を襲撃しようとした所、狙撃を受けた、という。

## 白熱する選挙運動と「圧勝」が招いた結果

このような混乱状態に至ったのは、アフマディーネジャード大統領が「圧勝」したとの内務省発表が、改革派支持者たちの疑念を抱かせたためであろう。彼の「圧勝」に対し、ムーサヴィー氏が「不正」を理由に「静かな抗議」を呼びかける中で、今回のデモは起きた(毎日新聞)。

今回の大統領選挙では、当初からアフマディーネジャード大統領とムーサヴィー元首相の一騎打ちになると目されていた。10 日間におよぶ選挙運動期間において、日を追うごとに、ムーサヴィー元首相の猛追ぶりが内外メディアで報道されるようになった。そのため、優勢と見られていたアフマディーネジャード大統領でも第 1 回目の選挙で総得票数の過半数を得ることは難しく、第 2 回目の決戦投票(19 日)で決着がつくだろう、と予想されていた。

ムーサヴィー氏はイラン・イラク戦争時に、革命後廃止された首相を務めた人物で、革命後に生まれた世代には、ほとんど名前を知られていなかった。しかし、都市部の比較的裕福な中産階級、若者、知識人、女性たちの支持を集め、20 年ぶりの政界復帰を目指した。イランでは初となる緑(イスラームを表す色とされる)をシンボルカラーとする選挙戦を展開し、選挙直前のテヘランの街は緑色を身につける若者や女性たちの姿であふれ返った。

それにもかかわらず、結果はアフマディーネジャード大統領の「圧勝」で、その得票率は 62.63%であった。バイデン米副大統領は 14 日放映の NBC テレビの番組で「疑問が残る」との考えを示し、改革派のムーサヴィー元首相が有力とみられた都市圏でも現職が高い得票率だったこと、言論の抑圧状況、をその理由に挙げた。

ムーサヴィー元首相は 14 日、選挙結果の承認権限を持つ護憲評議会に対し、選挙結果を取り消すよう正式に要請したことを明らかにした。彼はウェブサイトに掲載した声明で、「平和的かつ合法的な方法で全土での抗議活動を続けるよう呼びかける」と訴え、選挙結果の受け入れを拒否する姿勢を示した。しかし、最高指導者ハーメネイー師が大統領再選を称えて選挙結果にお墨付きを与えており、再選挙などの可能性はほとんどない。アフマディーネジャード大統領は 14 日に記者会見を開き、「(選挙で不正があったという)証拠は何もない」と述べ、「自由で本物の選挙で勝利した」と強調し、85%というイラン大統領選史上最高の投票率に関しては「世界に示す規範となる」と語った。